

■専門を越え、人と地域をつなぐー司法書士と仲間たちが育む“協働の仕組み”

地域に貢献したい企業と、地域課題の解決に取り組む団体やNPOをつなぐ、多職種・多業種のネットワークづくりを進めてきたのが、司法書士の清水敏博さんです。

士業として培った専門知識と地域活動を組み合わせ、「知り合う」「つながる」「分かち合う」の輪を広げています。

活動の原点はどこにあるのでしょうか。

司法書士として相談を受ける中で、税務・福祉・労務などが複雑に絡み合い、一人では解決できない場面に直面しました。そこで25年前、弁護士・税理士など11の士業によるネットワークを立ち上げ、暮らしや住まいの問題を支援できる体制を整えました。

この経験を通じて「一人ではなく、立場や専門を越えて連携することの大切さ」を実感し、それが後の“地域と人・企業をつなぐ活動”につながりました。

その考え方が「地域と企業・団体の橋わたし」に発展していったのですね。

地域での相談を重ねるうち、企業から「地域に貢献したいが関わり方がわからない」という声を多く聞くようになりました。

その思いと地域のニーズをつなぐ場として、2016年に異業種交流会「こらぼ会」を立ち上げました。企業、NPO、福祉施設、学校、寺院など、多様な人たちが顔を合わせ、知識や経験、ネットワークなどの資源を分かち合い、協働のきっかけを生み出しています。

参加企業の中に「専門を越えてつながることで、地元の実力になりたい」という思いが広がり、防犯や清掃など暮らしの課題を解決する団体も生まれました。

近年は地元企業の社会貢献を“仕組み化”する取組も進められていますね。

地域のNPOやこども食堂、福祉施設が抱える“困りごと”を発信し、企業が物品や人材で応援する仕組みとして「未来へのおくりもの」プロジェクトを立

ち上げました。

企業の思いと地域のニーズが結びつくことで、双方が元気になり、地域全体が少しずつ変わっていくのを実感しています。

印象に残っている取組はありますか？

人手が足りないNPOの活動に若手経営者が休日を使って参加したり、企業がこども食堂に食材を提供したりと、様々な“共創”が生まれています。また、高齢者施設のレクリエーションに高校生が参加するなど、世代を越えた交流も広がっています。

人と人が支え合う姿を体感できることは、地域の力になると感じています。

活動を続けるうえで大切にしていることは？

「知り合う」「つながる」「分かち合う」を大切にしています。地域活動は義務ではなく、「楽しいから参加する」「仲間に会いたいから続ける」という土壌づくりが重要です。継続には“仕組み”が必要で、後継者を育て、情報発信で活動を“見える化”することも欠かせません。

地域貢献活動に積極的に取り組むNPOや、これから始めたい人たちの思いが地域のあちこちで実を結び、地域の元気につながっていけばと思います。

今後の展望をお聞かせください。

地域の課題は、一つの専門分野だけで解決できません。だからこそ、立場や業種を越えて「組む」ことが大切です。

これからも、司法書士としての経験を生かし、人と人、企業と地域をつなぐ“橋”の役割を果たしていきたいと思っています。

